



愛着形成に必要な3つの基地機能

前号では愛着障がいの子に見られがちな特徴的な行動を取り上げました。今回は、それらの背後に潜む感情や行動の意味を整理し、対応を考えていく足掛かりにしたいと思います。

愛着の一般的な定義は、第34号で「特定の人との間に結ぶ情緒的な絆」と記しました。子どもにとって「特定の人」とは親（養育者）です。「情緒的な絆」については、米澤先生は子どもが抱く感覚・感情として次の3つがあるとし、それぞれ基地機能と称しています。

1 自分は親にとって大切な存在で、常に守られているという**安全の感覚** **安全基地機能**

※ 安全基地機能については、愛着に関する研究者に共通の概念です。

親の存在が安全基地として機能しないと、子どもは恐怖や不安などのネガティブな感情を誰も消してくれない、自分のことは誰も守ってくれない・助けてくれない、自分はどんなでもいいんだと思うようになり、無謀で危険な行動に走ったり、自分を守ること（自己防衛）に執着して事実を認めない・謝らないなど、強情な態度をとったりします。抑制タイプでは、安易に人とかわるのは危険であると感じて相手を避けたり、正面から叱られると相手との関係を遮断したりしますが、これも自己防衛です。ASDと愛着障がい併存タイプでは、新規場面への適応の困難さがあることから、日々新しいことを学ぶ授業に身を置くことが受け入れられず、飛び出しなどの逃避行動が表れやすくなります。

2 親との「つながり感」を基盤に育まれる、「この人（親）」といって落ち着く、ほっとする、楽しい、癒される」などのポジティブな感情、**安心感** **安心基地機能**

親の存在が安心基地として機能しないと、子どもは常に愛情飢餓状態にあることになり、刹那的な安心感を得ようと、相手を選ばず身体接触を求めたり、心地良さを感じるモノや口、床への接触（文具や工作した物をいじる・くわえる、指しゃぶり、床に寝転ぶなど【前号参照】）を好んだりします。また、求めても求めても安心できないことから生じるアピール（注意引き）行動や、愛情試し行動、愛情欲求エスカレート現象といった愛情欲求行動も見られるようになります。大きな声や音を立てる静寂潰しの行為や、不適切な排泄もその一つです。

3 親と離れて活動した後に、自身の行動や経験を親に報告して**共有したい**という**感覚** **探索基地機能**

通常は親と感情を共有することで、ポジティブな感情は持続・増加し、ネガティブな感情は減少・消滅するので、それが新たな活動（探索行動）に向かう原動力となるのですが、親の存在が探索基地として機能しないと、ポジティブな感情はすぐに消失し、ネガティブな感情ばかりが蓄積するため、活動性や自己評価の低下をきたしてしまいます。嫌な記憶は忘れ去る「解離」の状態を起こすこともあります。中には、問題行動を起こして注目を集め、影響力を行使できたという歪んだ効力感や優越感に浸り、一時的に自己評価を高めることを繰り返す子もいます。

本心では親に「一緒に喜んで欲しい」「辛さを分かってくれたい」と思っても、期待外れの反応に晒され続けてきた傷付き体験が、子どもに無理な我慢や諦めを強いることになり、不適切な相補行動を招いてしまうのです。

これらの基地機能を、学校でどこまで果たせるかが愛着の形成、ひいては行動改善の鍵となります。

（第39号に続く）

担当 学校生活適応支援アドバイザー（飯山・大瀧）
TEL 639-4392

